

# Kyoto Hollywood News 京都ハリウッド通信

## 最新の隻眼・隻腕侍 「丹下左膳」豊山悦司インタビュー



片眼片腕の時代劇ヒーロー・丹下左膳を豊川悦司が熱演。共演は和久井映見、野村宏伸、麻生久美子、かつみさゆり。今夏より東京の恵比寿ガーデンシネマを皮切りに、関西では梅田ガーデンシネマ、シネ・リーブル神戸で順次公開。脚本・江戸木純、監督・津田豊彦

■最初に企画を聞いた時のご感想は？  
—何で俺なんだろう？ というのが第1印象でした。

■左膳の映画はこれまで30本を越えますが、参考にされた作品はありますか？  
—山中貞雄監督の「百万両の壺」と大友柳太郎さんが演じられた「丹下左膳 決定版」、同じく大友さん主演の「丹下左膳 乾雲坤竜の巻」を観ました。僕自身の印象だけだと、誰が演じようとする根底に通じているものは、古臭い言葉かもしれないけど「反体制」である事。言い換えればアンチ。その見方、出し方が俳優さんの生き様で全然違ってくる。好対照の作品を見る事が出来て、すごく役に立ちました。

■敢えて言葉にする、豊川さんが演じられた左膳は何に対して反体制だったのでしょうか？  
—政治的なテーマというよりは人間の根この部分にあるアンチの精神ですね。一人の侍として生きていた時代ですから、庶民側に飛び込んで左膳という男になった変遷をどう表現するか。端的に言えば左膳の階級制度への嫌悪感と

—うのか。上手い言葉が見つからないけれども、自分は今も侍でなくなるという二ヒリスムみたいなものが、左膳のキャラクターを形成している一番のエネルギーマーな気がしています。

■左目左腕だけで演技する、殺陣をするという制約の中で演じられた感想は？  
—割と早い段階で慣れました。演じる役にカセがあればあるほど、生の自分と距離があればあるほど、役に入りやすかったですね。ただ物理的には目のメイクに毎日一時間半ほど、その後かかってくる物やらと非常に時間がかり、工夫が着物やらと非常に時間がかかると、やっぱり片目で演じるの



で、殺陣で距離感がつかめず、相手に刀をぶつけてしまわないかと、そういう心配りは必要でした。

■最後に一言。  
—左膳の何かを捨てて、何かを得ようとする姿勢は、僕はポジティブに感じられる。根底に大きな愛をひとつ持っているさがある。こういう侍が本当にいたのかもしれない。そこが演じていて一番面白かったですね。



今回もこのシリーズの魅力の一つとなっている。京都の景観もたっぷり描かれる

### 石ノ森章太郎「おみやさん」が帰って来る!

石ノ森章太郎原作による、テレビ朝日・木曜ミステリーの人気シリーズ「おみやさん」の第3弾が好評放映中。刑事のようだが刑事でない、京都府警の資料課という閑職に甘んじている元検察官の警察官がお宮入り(迷宮入り)の事件を解決する。出演は鴨川東署・資料課長のおみやさんと鳥居勘三郎に渡瀬恒彦、部下の七尾洋子に櫻井淳子、若手刑事の大滝鉄也に加勢大周、鑑識課員の金沢圭子に七瀬なつみ、署長の七尾清一郎に谷啓。前回は時効寸前というキーワードによってドラマに広がりを見せていたが、今回もそれを踏襲し、被害者と被疑者の関係や心情に踏み込んだハートフルなドラマを目指す。毎週木曜日・夜8時よりテレビ朝日系列にて放映中。



しとしとびつちゃんの歌詞で大ヒットした「子連れ狼」のレコード・ジャケット。明は橋幸夫。今回は加藤登紀子がつりとりて唄う

### 「子連れ狼」のついに完結!

大好評「子連れ狼」も今回ついに完結。完結編では柳生烈堂(夏八木勲)との最後の死闘をクライマックスに、冥府異道を打つ一刀(北大路欣也)と天五郎(小林豊)父子の涙と感動のドラマ、また、「しとしとびつちゃん」のついにしとしとびつちゃんの歌詞で「一世を風靡した主題歌」が挿入歌として、加藤登紀子の歌で復活する。これは視聴者の要望が多数寄せられた事から実現したもので、加藤登紀子は「天から母として子を見つめる子守唄」との思いを託して親子の情愛を歌い上げています。原作の小池一夫は存じ劇場界のヒット・メーカー、エール・ビル」の元ネタとなった「修羅雪姫」も小池先生の原作「子連れ狼」だ。小池一夫のエッセンスが凝縮された名作を見送られぬよう、7月5日より毎週木曜夜7時・テレビ朝日系列にて放映



### 井筒和幸監督最新作「パッチギ!」ルポ

井筒監督の最新作「パッチギ!」の撮影が去る5月26日、京都大学西部講堂で行われた。主演は「アバレンジャー」の塩谷俊。エキストラには京大の現役大学生も参加。「パッチギ!」とは「頭突き」の意味で、障害や困難を乗り越えるという意味の「パッチャダ」というハングル語が語源だと言われている。映画の舞台は68年の京都で、在日朝鮮人と日本人の高校生の喧嘩を通しての交流を描く。西部講堂前での撮影は、100人ほどの全共闘集会が行われ、そこに商品を積んだトラックで主人公らがカンパを求める場面。短い場面ながら井筒監督は納得の行くまで何度もテストを繰り返す。真夏を思わせる炎天下の中、心地よい緊張感を最後まで失う事なく無事終了。井筒監督は「この映画を見て、心の鼻血を出してほしい」と、ならではのコメントで熱い思いを語った。



## 今月の言葉

責任編集人  
山田誠二

1963年生まれ。京都を拠点に、映画のプロデュース、脚本、評論の他、コミック原作など多方面で活躍の作家。映画関連著作多数執筆。

この原稿を執筆している5月28日現在はまだ何もない。どうした訳か5月は7件も締め切りが集中。これを書き終えて、更にもう一件原稿が控えている。こんな忙しさをしているのに何故か寝ない。何故だろう...

2004年7月1日 山田誠二

